

「学」

校のような公共建築は、利用する人たちにとっては建物を選ばず、ただ与えられるだけです。このため、提供する側が材料や仕様、デザインなどを十分に吟味しなければならぬと考えます」と語るのは、木材全使用量三、七六〇立方メートルのうち、三、四三〇立方メートルのトレーサビリティの確実な県産材を用いて建設し、平成一九年に竣工した長野県稲荷山養護学校の設計・監理に携わった藤野珠枝さんです。現在は本業の建築士業務に加え、東洋大学の「木と建築で創造する共生社会研究センター(WASS)」の研究員に名を連ねています。

藤野さんは、郷里の長野県で住宅設計の仕事を手掛けた際に「山から木が出ないから地元の木は使えない」と言われ、「どうして？周囲の山にはこんなに木があるのに」と思ったことが、森林とのかかわりが始まるきっかけだったそうです。東洋大学農学部森林科学科に研究生として二年間修学し、また森林インストラクターの資格も取得しました。「建築の人は木を知らない、森の人・木材関係の人は建築を知らないということを実感しました。それ以来、建築と森と木を繋ぐことが人生の目標となり、いろいろな試みに挑戦しています」と今までの自分を振り返っています。

東洋大学WASSは、現在、木造の学校建築に関する多方面からの調査・研究を行っています。その中で知った使用者側からの木造校舎の維持管理面での課題は「手入れが面倒」「傷つき易い」といった木材特有のメンテナンスの問題

緑のエッセー

藤野アトリエ一級建築士事務所

藤野 珠枝

藤野 珠枝 (ふじの たまえ)
長野県生まれ。東京在住。東洋大学工学部建築学科卒業。一級建築士。森林インストラクター。環境カウンセラー。東洋大学非常勤講師。港区景観を考える会会員。森の仲間会員



背景は保存・再生・活用に取り組む東京・芝浦の協働会館

でした。これに対する藤野さんの考え方は「建築物は全てにおいてメンテナンスフリーということには有り得ません。そこに人がいて、日々生活し、風を入れ、具合の悪い部分は補修していくことが、コンクリート造であれ、木造であれ必要です。木造はコンクリート造に比べれば手入れが面倒かもしれないませんが、日々木の床の上を歩き、子供たちも一緒に掃除をしながら磨いていけばツヤツヤと輝いてきます。昔の学校なんてそうでしたよね。メンテナンスが困難といった管理者側の一方的な視点ではなく、木が持つ風合いや心理的な効果、身体的な効用等を考えると、子どもたちにとっては、学校はやはり木造が一番いいと思います。汚したら綺麗に拭いてやる。設計者は傷がつきにくいよう配慮し、使っていて傷んできたら手当をする。木の持つ特性をあたりますのことと知って使い、愛着が湧く建物をつくりたいですね」と木にこだわる心を熱く語っています。

「竣工後二年を迎えた稲荷山養護学校行ってきましたが、子どもたちや先生が喜んで大事に使ってくれているということが判り、建物も幸せだな」と思い、また、竣工時よりいい色合いになってきた建物を見てやはり木にこだわって良かったと思えば、多くの木造校舎が建てられるようになり、子どもたちに優しい教育の場を提供していくことが私たちの使命だと考えています」と言葉を結びました。